

## D. H. ロレンスの初期長編小説における

### ‘The Dark God’ の思想について (1)

——『白孔雀』と ‘The Dark God’ ——

山 田 晶 子

#### 序

‘The Dark God’ という用語がロレンスの小説に初めて出てくるのは、『カンガルー』においてである。

Really, I know the dark god at the lower threshold ... even if I have to repeat like a phrase. And in the sacred dark men meet and touch, and it is a great communion. But it isn't love. There's no love in it. But something deeper. Love seems to me somehow a bondage; and the spirit seems like something that belongs to the will alone. I can't help it ... I know another god.<sup>1)</sup>

‘The Dark God’ を日本語で訳す場合、これまでは「暗い神」と訳されてきている。しかし私は「黒い神」と訳す。この訳が本論の主題に相応しいからである。

「黒い神」とはどんな神であるのか。これは、ロレンスが1923年に出版された小説『カンガルー』の中で書きあらわしている用語であるが、C. ポルニッツが指摘しているように、宗教学上の神の概念ではなくて、

文学的神話上の神である<sup>2)</sup>。

ロレンス研究において、特に日本において、「黒い神」については研究が進んでいない、というよりも重視されていない。G. ハフは「黒い神」は「曖昧な概念」<sup>3)</sup>と、K. セイガーは「血なまぐさい神々」を喚起する「危険な思想」であると述べている<sup>4)</sup>。この思想は、ロレンスの中期から後期にかけての長編小説『カンガルー』や1926年出版の『羽鱗の蛇』にかなり明確に表れている。しかるにこれがロレンスの重要な思想として論じられないのは不思議に思われる。最終期の1928年に出版された小説『チャタレー卿夫人の恋人』や1929年出版の中編小説『死んだ男』ではこの思想は以前の作品よりも凝縮されているとは言えない。その思想が根底に横たわっているのは明瞭であるが、語句的な表面からはそれは影が薄くなっているからである。しかし確かに最後の作品の根底に至るまでこの思想が息づいていて、ロレンス研究に欠かせない主題であると思われる。

では初期の長編小説では「黒い神」の思想は出ているのであろうか。私は、ロレンスの第1作の長編小説からこの思想が表われていると思う。本論では1911年に出版された『白孔雀』(*The White Peacock*)における「黒い神」の思想の萌芽を考察し、ロレンスの「黒い神」を中心とした思想の重要性を辿ることが目的である。

「黒い神」の特徴を大きくまとめると、①キリスト教批判思想であり、それゆえ異教教的要素が入っており、②「黒い男」が発展した思想であり、③「支配する女性」に対して「男性のリード」を唱道しているという3点が挙げられる。『白孔雀』においてこの3点がどのように表われているのかを論ずる前に、「黒い神」という用語が表れている『カンガルー』、更にその思想が濃密な『羽鱗の蛇』をまず考察し、この2作品に照らし合わせて『白孔雀』に表れている「黒い神」を考察したい。

## I 『カンガルー』 に表れている ‘The Dark God’

前述したように、‘The Dark God’ (「黒い神」) という言葉がロレンスの小説に初めて登場するのは後期の小説『カンガルー』においてである。

主人公サマーズはオーストラリアのパースで、墮落した現代人を救おうとする2種類のグループと関わる。不気味かつ魅惑的なブッシュと万華鏡のように美しい海を背景にして、サマーズは、2種類のグループのそれぞれの代表者であるカンガルーというニックネームの主人公及びストラザーズと思想の闘争を繰り広げる。ロレンスがこの小説で戦っているのは、カンガルーに代表される思想つまりキリスト教の愛の思想と、ストラザーズに代表される社会主義の思想である。ロレンスの代弁者であるサマーズは最終的にどちらにも与しない。特にカンガルーの「愛の思想」との戦いは凄絶である。それほどロレンスはキリスト教に疑問を抱き苦しんできたのである。サマーズはロレンスの代弁者と思われ、彼がカンガルーの「愛の思想」に対抗するものとして持ち出すのが「黒い神」である。それはキリスト教の精神的な神ではなくて男根的官能的神であり、姿の見えない神、声を聞くことが出来ない神である。‘dark’ の意味の一つは姿が見えないという意味であり、別の意味は白人社会の ‘The White God’ に対してオーストラリアというイギリスの対しょ点に存在する神として、「白」の価値観に対して「黒」の価値観を持つ神という意味であり、またもう一つの意味はオーストラリアの原住民の肌の黒さを意味するものとしての「黒」の神である。それゆえ「暗い神」と訳すよりも「黒い神」と訳す方が適切であると思われる。次の引用はサマーズが述べる ‘The Dark God’ の特徴である<sup>5)</sup>。

“I don’t quite believe that love is the one and only exclusive force or mystery of living inspiration. I don’t quite believe that. There is something

else.

.....

“Why,” he said, “it means an end of us and what we are, in the first place.

And then a re-entry into us of the great God, who enters us from below, not from above.

.....

“How do you mean, enters from below?” he barked.

.....

“Not through the spirit. Enters us from the lower self, the dark self, the phallic self, if you like.”

“Enters us from the phallic self?” snapped Kangaroo sharply.

“Sacredly. The god you can never see or visualize, who stands dark on the threshold of the phallic me.”<sup>6)</sup>

またサマーズは「黒い神」は「恐怖の神」であることを強調している。それは北欧雷人のトール、ギリシア・ローマ神話のゼウス、ヴィーナス、バッカス、セム族のモロク、太陽神パール等全ての神を含むと言う。これらの「黒い神」の特徴には、C. ポルニッツが指摘しているように、ニーチェとの関連が見られる<sup>7)</sup>。ロレンスはニーチェの著作に若い頃から親しんでいて、『ツアラトストラはかく語りき』、『神々のたそがれ』、『権力への意志』等を読んでいる<sup>8)</sup>。ニーチェの思想も異教的である。

なんじらは隣人の周囲に群がって、おのが為すところを美名を以て呼ぶ。されど、われはなんじらに言いたい。——なんじらの隣人の愛とは、なんじら自身に対する、なんじらの悪しき愛である、と<sup>9)</sup>。

.....

同胞よ、なんじの背後に来るこの幽霊は、なんじより美しいではな

いか。なんじいかなれば、この幽霊になんじの肉と骨とを与えようと  
はしないのだ？ ——なんじは恐怖する。恐怖して隣人へと奔る<sup>10)</sup>。

そしてロレンスもニーチェも基督教の「隣人愛」を批判している。  
ニーチェが『悲劇の誕生』で論じた「アポロ神」と「ディオニソス（パッ  
カス）神」の対立で言えば、アポロは理性を表すのに対して、ディオニ  
ソスは本能の爆発を意味し、「黒い神」はディオニソス的混沌の性質を有  
するものである。それは基督教秩序的秩序と理性の神に対立するものな  
のである。次の引用は『この人を見よ』からの引用で、「ツアラトストラ  
はかく語った」の章からのものである。「彼」とはツアラトストラである。

彼が語れば必ずやそこに矛盾どう着がある。すべての精神の中で最  
も肯定的なこの精神。この精神の中ではすべての対立が新しい一つの  
肯定へと結ばれている。人間本性の最高、最深の力、最も甘美にして  
最も輕輕、しかも最も恐るべきものがたった一つの泉から不死の確実  
性をもって湧き出て来る。

.....

だが、これこそディオニソスの概念そのものではないか。

.....

——そうだ、ツアラトストラは一個の舞者者なのだ——<sup>11)</sup>

また、ロレンスはこの「黒い神」をしばしば動物と関連づけている。  
蛇・馬・鳥が繰り返すこの「黒い神」と関連づけられているが、その場  
合、動物は人間が憧れる強さと生命力を持つものであり、人間に虐げら  
れる存在ではない。上述したように、「黒い神」は理性を覆すものなの  
で、頭ではなく下半身に関わることが強調されている。それは「男根的」  
なのである。

そして「黒い神」は人間の「内部に存在する神」であり、人間の絶対的自我を掲げる者であり、ゆえにキリスト教の教義と対立する。人間の内部の自我の重視ということは、人間の孤独の重視にもつながり、これは「シングルネス」(singleness)という言葉でロレンスが『恋する女達』以来重視してきた思想である。

サマーズはカンガルーの愛の教えを振り切り、ストラザーズの人間集団的思想にも与せず、最後にはオーストラリアを去ってアメリカへ向かうのである。

## II 『羽鱗の蛇』に表れている 'The Dark God'

次に『羽鱗の蛇』における「黒い神」について考察しようと思う。『カンガルー』の次にメキシコで書かれた『羽鱗の蛇』では、「ケツアルコアトル」信仰という、古代メキシコ人が信仰していた宗教の復活が主題である。アイルランド人であるケイトは、ヨーロッパの生活に疲労して、魂の再生を求めてメキシコのメキシコ市に滞在していたが、最初はメキシコの負の面が目についている。そこは破壊的で人々は憎悪に駆られて死を求めているように思われる。大抵の人間は積極的に生きようとはせず、投げやりで怠慢にほかならない、と彼女の目に映る。新大統領は労働党出身で、経済的に国民を救おうとしている。このような時、ラモンとシプリアーノの二人の軍人が、モンテス大統領の政策では人間の魂を救えないと考え、またキリスト教は終わってしまった宗教でこれも人間の魂を救済することは不可能と考えて、「ケツアルコアトル」信仰を起こそうとしている。これにケイトは巻き込まれる。ラモンはインディアン

の血を引いているし、シプリアーノは完全なインディアンである。二人とも小柄で浅黒い、或は黒い姿が強調されている。この二人は最終的に「生きているケツアルコアトル」とそれに仕える「生きているウイチロポ

チトリ」と自らを呼ぶようになる。二人の黒さは、ロレンスが以前の作品からすでに描いている「黒い」主人公たちと重ね合わせられる。「黒い神」は「黒い男」が発展した思想である。「黒い男」の特徴は、①下層階級出身であるか、②異教神話に登場する小人的体格であったり、異端者であったり、のどちらかの分類に入る。つまり異教的であって、社会から虐げられている存在であるが、女性にとっては救いをもたらす存在なのである。①に属する人物としては、『白孔雀』のジョージとアナブル、『太陽』の農夫、『王女様』のロメロ、『チャタレー卿夫人の恋人』のメラーズがいる。②には『てんとう虫』のディオニス伯爵や『アーロンの杖』のリリィや『セント・モア』のルイスや『羽鱗の蛇』のラモンやシプリアーノがいる。これらの登場人物は既成の価値観を覆して新たな価値観を打ち立てようと苦闘している。特に「本性」を忘れて苦しんでいる女性を救いたいと思っている。ここに「支配する女性」つまり白い女性を黒い男性が救うというロレンスの思想の構図がある。「黒い男」は更に発展して「黒い神」に達している。

ラモンとシプリアーノの二人は、自分達を「黒い神」の化身であると考えている。そして『カンガルー』では形が見えなかった「黒い神」は『羽鱗の蛇』では鳥と蛇が合体した「ケツアルコアトル」という姿を取っているのである。『カンガルー』においては、主人公サマーズはキリスト教と社会主義の二つの思想と格闘したが、『羽鱗の蛇』においてもこの二つが「ケツアルコアトル」と対立している。しかし主としてキリスト教との対立が描かれている。それはラモンの妻である熱烈なキリスト教徒のドニヤ・カルロータとラモンの戦い、またケイトとラモン或はシプリアーノの思想的葛藤として描かれている。『カンガルー』では女性対男性の戦いは中心ではなかった。しかし『羽鱗の蛇』においては戦う両性は、女性はキリスト教的思想の持ち主として、男性は異教的存在として登場している。ケイトは最終的にシプリアーノと結婚し、彼女がメキシコへ

留まることを暗示させる言葉で小説が閉じられている。

ここで「ケツアルコアトル」宗教の特徴を述べてみよう。キリスト教が一道の宗教、つまり空を目指すものであるのに反して、鳥と蛇が合体したケツアルコアトルを信仰する宗教は二道、つまり地中（男の性的力）と大空（女の精神性）の両方を目指す宗教である。「鳥」は天空を飛翔し、上昇する存在である。一方「蛇」は大地を這ったり或は地中に潜ったりして下へ向かう存在であり、ケツアルコアトルは両者を均衡させようとしている。これは矛盾の統合である。ニーチェの言うディオニソス的な思想と関連していると言えよう。

ツアラトストラ己が心にかく語った時、あたかも正午の太陽は頭上に懸かっていた。ふと彼は訝る眼差しを中点に向けた。——高くに、鋭い鳥の叫びを耳にしたからである。——見よ！ 一羽の鷲が大いなる円を描いて翔っていた。この鷲に一匹の蛇が纏っていた。しかも、この蛇は頸の獲物のごとくではなかった。むしろ、彼の女の友のごとくであった。蛇は鷲の頭に絡まって、身を支えていた<sup>12)</sup>。

ここで鷲と蛇は相反するものとして、しかしながら調和を保つものとして描写されている。その描写は二道を信奉するケツアルコアトル信仰に似ている。二道についてはロレンスはエッセイ「王冠」で彼の思想を体系化して述べている。闇の始源の永遠（ライオンに例えられている）と光という未来の永遠（ユニコーンに例えられている）の二つの存在は相手を征服しようと戦っているが、均衡は永遠に來なくて、両者は戦い続けることによって、存在理由があるのであると。闇は異教的なものであり、光はキリスト教的なものである。そしてこの二つは命あるものが生きる上でどうしても必要なものであると説いている。そしてディオニソスは精神主義（キリスト教義）を破壊するものであると述べている<sup>13)</sup>。ロ



レンスがさまざまな作品の中で言いたいことは、彼の生きていた時代には精神面ばかり重視されていたので人間の生き方が偏っていてそれを是正するためには肉体面にもっと関心を払うべきであるということであろう。

We are enveloped in the darkness, like the lion: or like the unicorn, enveloped in the light.<sup>14)</sup>

.....

And no cessation. For we are two opposites which exist by virtue of our inter-opposition. Remove the opposition and there is collapse, a sudden crumbling into universal nothingness.<sup>15)</sup>

人間はこのような二つの矛盾した要素を内包する存在である。一方の要素を払拭することは不可能なのである。ロレンスがキリスト教の一道に反対する所以である。

彼がキリスト教に対抗する神として強調している神がパン神である。「王冠」にもパン神への言及があるし、『白孔雀』の「悪意あるパン神」と述べられているアナブルや『チャタレー卿夫人の恋人』のメラーズがパン神と関連づけられていることから分かるように、ロレンスは最初から最後の作品にまで、パン神に言及しこだわっている。なぜならパン神はディオニソスと密接な関連があるからである。パンは牧羊神であり上半身は人間で下半身は山羊でありひげを生やして毛深く角を生やしている。彼は飽くなき性欲を持っている。パンは「すべて」という意味であり、生命エネルギー「全体」、神の「すべて」、さらに生命の「すべて」を示している。パンからパニックという言葉が生まれたが、この感情は精神を錯乱させ、感覚を狂わせるパン神が出現した時に生じる感情である。

ところがある船乗りが「偉大なるパン神は死んだ」と叫んだ。これは新プラトン派では異教の神々の死を海鳴りが予告したものとする。一方フランスの社会思想では、彼の死は性的解放から社会秩序への変化を表しているが、生命力を失ってしまうので、パンが消えると人々は絶望してしまうことになる<sup>16)</sup>。

パン神が人間を錯乱状態に陥れる点はディオニソスと共通である。「満たされることのない性欲を持ったこの淫欲な神は、ディオニソスに従う騒々しく無秩序な一団にも関わっている。」<sup>17)</sup>ディオニソスはワインと木と雄山羊の神であり、男根の神である。そして精神分析では彼は無意識からわき上がる得体のしれない力を象徴しているのである<sup>18)</sup>。ディオニソスはバッカスとも呼ばれるが、これは「理性を失ったもの」という意味である。彼は雄牛と山羊と蛇に変身すると言われている<sup>19)</sup>。蛇は、キリスト教で神の敵であるサタンが蛇に化身してイヴを誘惑したため、大抵の場合悪の存在として忌み嫌われていることから分かるが、異教的な存在である。しかしロレンスは蛇に対して憧憬を抱いている。「蛇」という有名な詩では、作者は蛇を、追放されたがまた再び王冠を抱くべき存在であり、自分が受けた教育が蛇を一瞬嫌悪したと言うとき、「教育」とはキリスト教の規律を表していると考えられる。彼は「教育」のせいで蛇を嫌悪した自分を恥じている。そして蛇が偉大な存在として蘇った作品が『羽鱗の蛇』という作品なのである。

ワインとの関連からはディオニソスはとりわけ薬にもなれば恐ろしい麻薬にもなる酒の二面性を象徴している。理性を忘れた時の状態として踊りがある。ロレンスの作品では中心となる登場人物たちがこの狂乱の踊りを踊るという場面が少なからずある。

もっともディオニソス的なのは、『死んだ男』でも出てくる「黒い太陽」である。他にもインディアンたちは「火のように水のなかに立っている」とも表現されている。

And we had to be slaves, because we had only got the first strength, we had lost the second strength.

Now we are getting it back. We have found our way again, to the secret sun behind the sun. There sat Quetzalcoatl, and at last Don Ramon found him. There sits the red huitzilopochtli, and I have found him. For I have found the second strength.<sup>20)</sup>

矛盾するものを再び統合出来る偉大な星の男、偉大な神性の男はラモンである。ラモンも彼の片腕であるシプリアーノもとても黒っぽい肉体をしていてケイトはびっくりする。ラモンはパン神を思わせる山羊ひげを生やしており、その黒さは蛇の黒さのようであると表現されている。シプリアーノもパン神と関連づけられている。彼も山羊ひげを生やし、神魔の顔をしている永遠の牧神と表現されている。次の引用は、シプリアーノと結婚したケイトが、彼のパン神的男性の力を感じる箇所である。

As he sat in silence, casting the old, twilit Pan-power over her, she felt herself submitting, succumbing. He was once more the old dominant male, shadowy, intangible, looming suddenly tall, and covering the sky, making a darkness that was himself and nothing but himself, the pan male. And she was swooned prone beneath, perfect in her proneness.

It was the ancient phallic mystery, the ancient god-devil of the male Pan. Cipriano unyielding forever, in the ancient twilight, keeping the ancient twilight around him. She understood now his power with his soldiers. He had the old gift of demon-power.<sup>21)</sup>

二五二

ケツアルコアトル信仰は男性の女性に対する優位を説くものである。これは「柔らかな女性」を求める主題であり、ケイトがアルヴァイナや

コニーに繋がる女性に変貌していく過程が描かれている。ロレンスが特に『恋する女たち』で批判しているグッドルーンやハーマイオニーなどの意志に凝り固まった固い女からの変貌である。キリスト教と明白に対立している点は、「ケツアルコアトル」教が「明けの明星」つまりキリスト教ではサタンである「ルシファー」を、信仰の中心に置いていることから理解できる。

That which we get from the beyond, we get it alone. The final me I am, comes from the farthest off, from the Morning Star.<sup>22)</sup>

He felt his spirits sinking again, his limbs going like lead. There is only one thing that a man really wants to do, all his life: and that is, to find his way to his God, his Morning Star, and be alone there. Then afterwards, in the Morning Star, salute his fellow man, and enjoy the woman who has come the long way with him.<sup>23)</sup>

「明けの明星」は夜と昼の接点に出現する星であり、夜と昼の一瞬の均衡を示すものである。それはまたバッカスやパン神との繋がりを言及されている。このように『羽鱗の蛇』では「白い女」ケイトが「黒い男」に感化されていく過程が描かれている。

### III 『白孔雀』に見られる 'The Dark God' の萌芽

以上で述べてきた「黒い神」の特徴は『白孔雀』に萌芽が見られる。

#### (1) アナブル

先ず「黒い男」については主人公ジョージと脇筋に登場するアナブル

がその性質を受け継いでいる。ところでアナブルは、脇筋の人物とは言っても、作者ロレンスの思想を代弁している重要人物である。アナブルの人間嫌いは、『恋する女たち』の、ロレンスを彷彿とさせる主人公パーキンや『チャタレー卿夫人の恋人』の主人公メラーズにおいて更に明確になっている。アナブルの思想は異教的である。

“Do as th’ animals do. I watch my brats ... I let ‘em grow. They’re beauties, they are ... sound as a young ash pole, every one. They shan’t learn to dirty themselves wi smirking devilry ... not if I can help it. They can be like birds, or weasels, or vipers, or squirrels, so long as they can ain’t human rot, that’s what I say.”<sup>24)</sup>

“Be a good animal, true to your animal instinct” was his motto.<sup>25)</sup>

このアナブルの意見は精神的な「愛」によって人間を教化しようとするキリスト教的思想に対立するものである。異教では動物崇拝をする。また、後にネザーミアの森を出ていくシリルとジョージについて、シリルは自分達を「若木が折られるような気がする」と述べている。「木」の信仰も異教的である。それは森や田園の神であるギリシア・ローマ神話のパン神やディオニソス神と関連している。アナブルは ‘He stood in the rim of light, darkly: a fine, powerful form, looming above us. He did not move, but like some malicious Pan’<sup>26)</sup>と描かれ、その黒さは光と対立しここに異教的な「黒い神」の要素が表れている。

アナブルはレディ・クリスタベルと恋をして結婚したが、彼女はだんだん精神的になって彼を苦しめ二人の結婚生活は破綻する。この時以来彼は女性に嫌悪感をいだくようになる。シリルとジョージが教会の廃墟でアナブルに出会った時、白い孔雀が飛んできて鳴く。白孔雀を見たア

ナブルは “That’s the soul of a woman ... or it’s the devil”<sup>27)</sup> と言い、その鳥は虚栄に満ちていて、国中を駄目にすると言うが、その時題名の『白孔雀』の意味が明らかになる。それは女性の象徴なのである。ここで「黒い男」と「白い女」の対立が表れ、それは異教的な男とキリスト教的な女の対立と考えられる。アナブルの異教性は “One’s more a man here in the wood, though, than in my lady’s parlour, it strikes me.”<sup>28)</sup> という言葉や、シリルのアナブル評「思ったより立派な奴だと思ふ」、「魂がない」が「浅黒いいんうつな顔」をした「偉大な活力と生命力」を持った男、という言葉にも表れている。

そしてロレンスが表現しようとする意図はアナブルが死んでジョージによって表現されることになる。

## (2) ジョージ

次に主人公ジョージとアナブルの共通点について考察する。先ずジョージも「黒い男」であることが、“What a pretty arm, brown as an overbaked loaf.”<sup>29)</sup>とレテイが評する腕をしていて、“Your arms tempt me to touch them. They are such a fine brown colour, and they looked so hard.”<sup>30)</sup>という彼女の言葉などから分かり、外観的に異教的存在であることが分かる。性質としては、麦刈りををする姿は “You are picturesque”, “Quite fit for an Idyll.”<sup>31)</sup>という彼についての意見や、夕飯のときには腹一杯食べ、ぶどう酒をたくさん飲むというような表現にディオニソスの特徴があり、それはまた結婚後は居酒屋を経営する、という点からも伺える。また、形式に囚われないダンスが好きであることもディオニソスの要素として挙げられる。

“Come on ... come on” ... and in a moment they were bounding across the grass. After a few steps she fell in with him, and they spun round the grass. it

was true, he leaped, sprang with large strides, carrying her with him. It was tremendous, irresistible dancing. Emily and I must join, making an inner ring. Now and again there was a sense of something white flying near, and wild rustle of draperies, and a swish of disturbed leaves as they whirled past us. Long after we were tired they danced on.

At the end, he looked big, erect, nerved with triumph, and she was exhilarated like a Bacchante.<sup>32)</sup>

"If you were a faun, I would put guelder roses round your hair, and make you look like Bacchanalian."<sup>33)</sup>

ジョージもアナブルと同じように、女性によって破滅へ向かう男である。彼を破滅へと誘う女性はレテイであり、彼女は語り手シリルの妹である。「白孔雀」とはまさに彼女のことである。キリスト教では異端として迫害を受けた「魔女」という存在があるが、レテイは「黒い男」を迫害している「白い魔女」の存在である。ロレンスは否定的存在としての女性を「白い女」、つまり異教にとっての「白い魔女」として描写していて、その最初の人物像がレテイなのである。

ジョージが住むストリー・ミル農場は、森の側にありその世界は眠っている世界である。暗さ、古さ、過去、老いの世界である。教養があつて女性的魅力に溢れたレテイはジョージをこの眠りから無理矢理目覚めさせようとするが、彼はその結果破滅していく。『白孔雀』の森はそのままでの存在で存続することをロレンスは認めていない。眠りから覚めることは必要である。しかし無理矢理目覚めさせることは危険なのである、と彼は言いたいのだと思われる。ロレンスの代弁者である語り手シリルの考えを引用する。

I was thinking the place seemed old, brooding over its past.

.....

“Your life is nothing else but a doss. I shall laugh when somebody jerks you awake,” I replied.<sup>34)</sup>

ところがレテイは無理矢理ジョージを覚醒させる。小説の冒頭からこの点がはっきりとしている。レテイに抵抗できないジョージはただ破滅への道を一直線に辿るのみで、『白孔雀』はジョージの破滅の物語、つまり「黒い男」が「白い女」に敗北する物語なのである。しかし人物像としてのレテイは魅力的な女性であり、イギリスで女性観が変化しつつある時代に彼女自身も新しい思想を学びながらも、完全に新しい女性になれないで苦悶する様が伺える。

ジョージを破滅させる点について考察してみよう。彼女は彼の肉体的美しさと心の純朴さのゆえに彼に心を引かれている。しかし彼が教養がない農夫という点でからかい始める。彼は「牛」「豚」などと軽蔑される。特に牛と関連づけられているが、これはディオニソスが雄牛に変身したという点からも、ジョージとディオニソスが関連づけられる。ジョージはレテイに合わせようとして次第に機械化された都会的な考え方に感化されていく。

“If you would,” said George “I’d go with you. But not by myself, to become a fat stupid fool, like my own cattle.”<sup>35)</sup>

レテイにはいつも頭が上がらなかったジョージは、彼女をレズリと争うが、彼女は、炭坑経営者であって社会的に地位が高く教養も豊かで見た目もまあまあのレズリを選ぶ。しかしレズリは結婚後に幸せになったかと言えば必ずしもそうではなく、自分に自信が持てなくなってしまう。



レテイも自己放棄をして他のもの(特に子供)の召し使いになってしまった感じで、不幸な存在になる。レテイが青い服を着て雄孔雀のような描写をされている所は、夫に君臨する意志の強い女になっていて、男性化したことを表現していると思われる。彼女が本当に求めている男性はジョージであったことが推察される。

...“You see, I couldn’t help it.”

“No, why not?”

“Things! I have been brought up to expect it ... everybody expected it ... and you’re bound to what people expect you to do ... you can’t help it. We can’t help ourselves, we’re all chess-men,” she said.<sup>36)</sup>

レテイの母親は娘がレズリと結婚することを望んでいて、レテイは母親の希望に沿ったということだろう。彼女の決断力の弱さが表れていて、人間としての未熟さが伺える。『恋する女たち』のアーシュラや『アルヴァイナの墮落』のアルヴァイナや『チャタレー卿夫人の恋人』のコニーと比較すれば、レテイの弱さがはっきりと分かる。

一方、ジョージはいとこで居酒屋の娘メグと結婚する。メグは始めは女性的な美しさの権化として描かれていて、ジョージも幸せであったが、だんだん彼女も夫を支配するようになり、彼は束縛感を感じて不幸になる。彼の不幸は今度は家族に不幸を与えるという悪循環がはじまり、彼は最後には馬仲買の商売に失敗し、酒浸りになり、重いアルコール中毒症にかかってしまう。彼は酒の神ディオニソスにはなれず、皮肉な結末を迎えてしまう。

### (3) 支配する女性の勝利

レテイと同じく精神的な女性像として描かれているのが、ジョージの

姉であるエミリーである。彼女は3部から成っている小説の第2部までは、シ ril を慕う女性であり、小学校の教員を勤めている。シ ril はこの小説の語り手であり教養豊かで知識が豊富な大学生なので、エミリーは彼の学識に引かれていると思われる。というのも彼女は弟ジョージを野蛮な農夫として軽蔑しきっているからである。彼女はレテイと同じように精神性が人間にとって非常に重要であるとする女性なのである。次の引用は、彼女とシ ril の会話である。

“He irritates me in everything he does and says,” burst out Emily with much heat.

“He’s a pig sometimes,” said I.

“He is!” she insisted. “he irritates me past bearing, with his grand know-all way, and his heavy smartness ... I can’t bear it, And the way mother humbles herself to him ...!”<sup>37)</sup>

また、森にしかけられているウサギ等を取る罠にはまってしまった飼猫を、ジョージが池に沈める場面では、エミリーとレテイの次の会話がある。

“Has he done it?” asked Emily ... “and did you watch him? If I had seen it I should have hated the sight of him, and I’d rather have touched a maggot than him.”

“I shouldn’t be particularly pleased if he touched me,” said Lettie.

“There is something so loathsome about callousness and brutality,” said Emily. “He fills me with disgust”.<sup>38)</sup>

シ ril はジョージの美しさ、特に肉体的美しさに引かれ、彼の長所に

しばしば言及する。またレテイも彼の肉体的、感情的美しさに引かれて  
いる。一方でエミリーには彼が弟という近い位置にいるため彼の欠点ば  
かりが目につくのである。しかしレテイとエミリーには、教養がない男  
性を軽蔑する共通点があり、それはアナブルに対して二人とも本能的に  
憎悪を感じている点から明白である。女性たちはキリスト教的精神と魂  
を重視する存在である。次の引用はレズリがレテイに言う言葉である。

“Damn thin souls, Lettie! I’m not one of your souly sort. I can’t stand Pre-  
Raphaelites. You ... you’re not a Burne ... Jonesess ... you’re an Albert  
Moore. I think there’s more in the warm touch of a soft body than in a prayer.  
I’ll pray with kisses.”<sup>39)</sup>

また、アナブルも精神的女性をキリスト教と関係づけている。次の引用  
はアナブルが女性に対する憎悪をシリルにぶちまける箇所である。アナ  
ブルは孔雀を貴婦人の魂と言って憎悪する。

“The proud fool! ... look at it! Perched on an angel, too, as if it were a  
pedestal for vanity. That’s the soul of a woman ... or it’s the devil.”<sup>40)</sup>

アナブルは前妻のクリスタベルを心に浮かべているのである。彼女は美  
しい貴婦人であったが、結婚してから精神的になり、彼を支配するよう  
になったので彼は彼女から逃げて家を出てしまったのである。

結婚したレテイも夫に対して支配的になり、エミリーも第3部では教  
養がある農夫トムと結婚し主婦になる。彼女も夫に対しては支配する存  
在として描かれている。また、ジョージが結婚したいとこのメグは最初  
は彼にとって最高の女性と思われたのだが、だんだん彼を支配するよう  
になり、ジョージにとって家庭は牢獄になり、彼は苦痛をまぎらすため

に酒に溺れて重度のアルコール中毒に罹ってしまう。彼は小説の結末ではエミリー一家に世話を受けている。エミリーの世話になるジョージの姿——ここには小説の冒頭から見られたジョージとエミリーの対立において、エミリーが勝利したことが明白に書かれている。つまり支配する女性、教養を重視するキリスト教的精神を持った「白い女」が「黒い男」に勝利した姿が見られるのである。かつて美しかったジョージの肉体は、最終的に無惨な醜さを露呈する。先ずシリルの目に映ったジョージの美しい姿を、次に彼が醜くなった時の姿を引用する。

We stood and looked at each other as we rubbed ourselves dry. He was well proportioned, and naturally of handsome physique, heavily limbed. He laughed at me, telling me I was like one of Aubrey Beardsley's long, lean ugly fellows.

.....

But I had to give in, and he bow to him, and took on indulgent, gentle manner. I laughed and submitted. For he knew how I admired the noble, white fruitfulness of his from.

.....

... he rubbed his hair into curls, while I watched the deep muscles of his shoulders, and the bands stand out in his neck as he held it firm. I remembered the story of Anable.<sup>41)</sup>

この引用からは、教養ある男よりも肉体的美しさを備えた男が優位にあることが描かれている。頭が非常によいが肉体的魅力に乏しいシリルは、教養がないが純朴で見事な肉体の持ち主であるジョージに、男としての存在感において自分が負けていることを認めている。このときシリルはジョージとアナブルを同一視しているのだが、アナブルが敗北した

ようにジョージも小説の結末では敗北してしまう。

When he took off the jacket of his pyjamass to wash himself I felt choked. His arms seemed thin, and he had bellied, and was bowed and unsightly. I remembered the morning we swam in the mill-pond. I remembered that he was now in the prime of his life. I looked at his bulish, feeble hands as he laboriously washed himself. The soap once slipped from his fingers as he was picking it up, and fell, rattling the pot loudly. It startled us, and he seemed to grip the sides of the washstand to steady himself. Then he went on with his slow, painful toilet. As he combed his hair he looked at himself with dull eyes of a shame.<sup>42)</sup>

#### IV 結 論

ジョージは肉体が醜くなるとき心も感情も醜くなる。他人を傲慢に批判し、自分自身をほめるのだ。二十代の時美青年で純真であった彼を、十年後には醜い肉体と醜い心を持った駄目な人間にしていたのは何であったのか。作者は、彼が減びていく過程の描写を読者が納得いくまで十分に書き切っているとは言えない。しかし、彼がシ ril に語る苦しみには、妻のメグによって支配されていることと、日曜日に教会へ行かなければならないことであることが述べられている。ロレンスの時代において教養がある中産階級は、キリスト教の精神を大事にする人々と関連している。そしてロレンスにとっては、キリスト教的精神性を備えた人間は女性と関連している。ゆえに、ジョージは「キリスト教的な支配する女性」によって減ばされたと言えるであろう。

「支配する女性」としてロレンスがたびたび言及する女性像にオスカー・ワイルドが書いた「サメロ」がいる。彼女はヘロデ王の前で舞を踊り、

褒美としてヨハネの首をもらった。男に対する絶対的な支配力を持った女である。男は彼女から逃れられないのである。レテイもレデイ・クリスタベルもエミリーもメグも「支配する白い女性」である。ロレンスは『白孔雀』という題名に「支配する女性」を凝縮していると言えよう。『羽鱗の蛇』では、二道を司るケツアルコアトルは「夜を翔る虹色の孔雀」とも表現されていて、「白孔雀」が代表するキリスト教的一道を排斥している。二道を司る孔雀は色鮮やかである。しかし『白孔雀』においては、まだ「黒い神」であるパン神的強い男性は、ジョージとアナブルにその萌芽が表れているのみで、完全な存在としては登場していない。しかし作者はその再生の願いをジョージとアナブルに込めていることが分かる。かくして「黒い神」にロレンスが込めている思想は「女性をリード出来、そして社会をもリード出来る強い男性の復活」ということだと言えよう。そしてロレンスは、このような強い男性像が異教的世界に存在した、と捉えていたのである。

以上論じてきたように、『白孔雀』においては序で提起した「黒い神」の3つの特徴、①キリスト教批判思想であり、それゆえ異教的要素が入っており、②「黒い男」が発展した思想であり、③「支配する女性」に対して「男性のリード」の唱道が入っていて、「黒い神」の思想の萌芽が見られるのである。

## 注

- 1) D. H. Lawrence, *Kangaroo* ed. by Bruce Steele (Cambridge U.P., 1994), p. 137.
- 2) C. Pollnitz, "Raptus Virginis": The Dark God in the Poetry of D. H. Lawrence' in *D.H. Lawrence: Critical Assesment Volume II The Fiction (I)* ed. by D. Ellis & O. De Zordo (Helm Information, East Essex), p. 39.
- 3) G. Hough, *The Dark Sun* (Octagon Books, New York, 1973), p. 109.
- 4) K. Sager, *The Art of D. H. Lawrence* (Cambridge U.P., 1966), p. 137.
- 5) 拙論「Kangaroo 論——“the dark God” について——」（『文学論叢』第102輯），pp. 9-10.

D. H. ロレンスの初期長編小説における 'The Dark God' の思想について (1)

- 6) *Kangaroo*, pp. 134–135.
- 7) 'Raptus Virginis', p. 38.
- 8) K. Sager ed., *A. D. H. Lawrence Handbook* (Manchester U.P., New York, 1982), p. 69.
- 9) ニーチェ著 竹山道雄譯『ツァラトストラかく語りき』上巻 (新潮社, 昭和28年), p. 112.
- 10) 同上, p. 113.
- 11) ニーチェ著 川原栄峰訳『ニーチェ全集15:この人を見よ 自伝集』(ちくま学芸文庫, 1994年), pp. 140–143.
- 12) 『ツァラトストラかく語りき』 p. 41.
- 13) D. H. Lawrence, *Phonies II* (Heinemann, London), p. 402.
- 14) *Ibid.*, p. 367.
- 15) *Ibid.*, p. 368.
- 16) ジャン・シュヴァリエ／アラン・ゲールブラン共著 金光仁三郎他共訳『世界シンボル大辞典』(大修館, 1982), pp. 801–802.
- 17) ルネ・マルタン監修 松村一男訳『図説ギリシア・ローマ神話文化事典』(原書房, 1992), p. 168.
- 18) 『世界シンボル大事典』 pp. 672–673.
- 19) 『図説ギリシア・ローマ神話文化大事典』 p. 128.
- 20) D. H. Lawrence, *The Plumed Serpent* ed. by L. D. Clark (Cambridge U.P., 1987), p. 363.
- 21) *Ibid.*, p. 311.
- 22) *Ibid.*, p. 252.
- 23) *Ibid.*, p. 253.
- 24) D. H. Lawrence, *The White Peacock* ed. by A. Robertson (Cambridge U.P., 1983), p. 132.
- 25) *Ibid.*, p. 147.
- 26) *Ibid.*, p. 130.
- 27) *Ibid.*, p. 148.
- 28) *Ibid.*, p. 131.
- 29) *Ibid.*, p. 118.
- 30) *Ibid.*, p. 48.
- 31) *Ibid.*, p. 48.
- 32) *Ibid.*, pp. 55–56.
- 33) *Ibid.*, p. 214.
- 34) *Ibid.*, p. 1.

35) *Ibid.*, p.186.

36) *Ibid.*, p.120.

37) *Ibid.*, p.5.

38) *Ibid.*, p.14.

39) *Ibid.*, p.85.

40) *Ibid.*, p.148.

41) *Ibid.*, p.222.

42) *Ibid.*, p.321.

尚、本論は1999-2000年度愛知大学個人研究助成費による研究論文である。